様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５９５

研究課題名（和文）教師の成長をめざす再帰的日本語教育実践研究法の構築

研究課題名（英文）Construction of a recursive method of practical Japanese language education study aimed at teachers' personal growth

研究代表者
得丸　智子（TOKUMARU, Satoko）

宮崎大学・教育文化学部・講師

研究者番号：６０３４３６１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、現象学の流れを汲む思考法TAE（Thinking At the Edge）を応用した「教師の成長をめざす再帰的日本語教育実践研究法」の構築である。
研究期間を通じ、(1)理論モデルの研究、（2）研究法と研究ツールの開発、（3）日本語教師や教育実習生からのデータ収集、（4）「教師の成長」の観点からの効果検証、（５）インターネットサイト「TAEリフレクション」の構築と公開、をおこない、おおむね目的を達成できた。「教師による実践研究による教師の成長」という再帰的循環の創出に一歩を踏み出した。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to construct a recursive practical research method for Japanese language education to facilitate teachers’ personal growth. The method applies a way of thinking, namely Thinking At the Edge (TAE), which is based on phenomenology.
During the research period, we: (1) studied a theoretical model, (2) developed a research method and research tools, (3) collected data from Japanese language teachers and trainee teachers, (4) verified the effectiveness of the data from the viewpoint of facilitating teachers’ personal growth, and (5) developed and launched an Internet site named TAE Reflection. These processes helped us accomplish our research objective. We have taken the first step in creating a recursive cycle that can facilitate teachers’ personal growth through practical research conducted by the teachers themselves.

研究分野：日本語教育

キーワード：教師の成長　日本語教師養成　内省　TAE　ユージン・ジェンドリン

１．研究開始当初の背景

日本語教師教育（教師養成）は、「教師トレーニング型」から「教師成長型」へとシフトしている。これに伴い、「自己研修型教師」「内省的実践家」がめざされ、教師による教育実践研究が重要となっている。しかし、当時、広くおこなわれていたアクション・リサーチにおいては、手順そのものが内省を生じさせるわけではなかった（小林 2008)。「教師の成長につながる内省を引き起こすような研究手順をもつ実践研究法」が必要であった。

研究代表者は、現象学の流れを汲む哲学者ユージン・ジェンドリンらが開発したTAE(Thinking At the Edge)を応用した教育実践研究をおこなってきた（得丸 2010 他)。TAE は、「うまく言葉にできない感覚」を明確な言葉に展開する方法である。まず、体験的に得られた感覚（うまく言葉にできない感覚）を「マイセンテンス」として一文で全体把握し（パートⅠ)、次に、その感覚の特徴を複数の「パターン」として抽出し（パートⅡ)、最終的に、数個のキーワードを用いた「結果文」として、明確な言葉で記述する（パートⅢ)。得丸は、教育実践研究をおこなう過程で「TAE を用いて教師が実践研究をおこなうと、教師が活力を得て、その後の教育実践に肯定的影響がもたらされる」との実感を得ていた。TAE の手順には、心理学分野で実績のある内省法「フォーカシング」が含まれている。「TAE は、実施する人に内省プロセスを引き起こし、内面的成長を促進する」との見込みをたてることが可能であった。

２．研究の目的

そこで、研究代表者（得丸）と研究分担者（小林）は、「教師の内省を引き起こす手順を備えた教育実践研究法」の開発を目的に、５つの作業目標のもと、研究をおこなった。

(1)TAE の内省（再帰）理論モデルの研究
(2)理論モデルに基づく研究ツールの開発
(3)研究ツールを用いたデータ収集
(4)主に「教師の成長」の観点での効果検証
(5)研究ツールの公開とサイト構築

３．研究の方法

(1)理論モデル研究の方法

理論モデルの研究は、文献調査と、研究会や学会での情報収集により、おこなった。

(2)研究ツール開発の方法

研究ツールとして、TAE シート（書き込みシートと教示シート）を開発した。書き込みシートは、研究代表者が過去に質的研究用に開発したシートを、日本語教師の教育実践振り返り用に改変した。教示シートは、理論モデル研究の成果をもりこみ新たに作成した。

TAE ソフトの開発は専門家に依頼した。ただし、専門家の助言により計画を一部変更した。当初は、ウェブ上でシートに書き込み一時保存や最終保存ができる方式を構想していた。しかし、「教師の教育実践の内省」という事柄の性質上、ウェブ上で保管するデータに、教師や学生の個人情報が書き込まれる可能性を排除できず、情報管理に多額の費用を要することが判明した。このため、使用者（実施者）が TAE シートをダウンロードし、オフラインで作業し管理する方式とした。

計画の一部変更に伴いソフト開発の経費が安価となったため、当初より計画していた英語版に加え、中国語版、韓国語版、インドネシア語版、アラビア語版（シートのみ）を作成することとした。それぞれ、該当国出身の留学生に翻訳を依頼した。

(3)データ収集の方法

宮崎、北九州、台北（台湾）でデータを収集した。大学院生に研究協力を依頼し、同意が得られた６名について、海外教育実習の振り返りを実施してもらった。研究代表者が立ち会いのもと、教示シートを読み上げる方法でおこなった。日本語教師に研究協力を依頼し、同意が得られた４名に、教育実践の内省を実施してもらった。研究協力者が単独で、

教示シートを読みながら書き込みシートに記入する方法でおこなった。平成 25 年度と平成 26 年前半は、紙媒体の TAE シートを用い、平成 26 年秋以降は、試験運用中の TAE サイトを試用しながらおこなった。データ収集と併行して、TAE シートや TAE サイトの改善点について、ヒアリング調査をおこなった。また、「教師による実践研究による教師の成長」というテーマの性質上、研究代表者、研究分担者自身も、TAE シートを用い、自らの教育実践の振り返りを実施した。

(4)効果検証の方法

主に「教師の成長」の観点から、以下の方法でおこなった。

- 書き込みシートに記入された「マイセンテンス」「パターン」「結果文」等の内容や文言の分析（12 名）
- 質問紙の実施（２名）
- インタビューの実施（6 名）

(5)研究ツール公開とサイト構築の方法

上記の過程を経て作成した TAE シート（書き込みシート、教示シート）を、TAE サイトからダウンロードする方法で公開した。TAE サイトは、研究代表者が公開原稿の執筆、解説動画のシナリオ作成等をおこない、動画作成やサイト構築は専門家に依頼した。

４．研究成果

上の項の番号と対応させ、(1)、(2)(5)、(3)(4)の３項目にまとめて述べる。

(1)理論モデルの研究

①ジェンドリンの言語理論は、認知意味論と親和性があるとの方向性が得られた。両者は、身体性に基礎を置く点で共通しており、TAE における「論理性」は、マーク・ジョンソンらの身体性に根ざす「論理性」と同根とみなせる。例えば、論理形成のパートである TAE パートⅢは、２つのキーワードを A=B と置くことから始めるが、ジョンソンは、直立歩行で左右のバランスをとることを論理の始まりとして重視する。一方、両者には相違もある。ジョンソンらがプライマリーメタファを要素とする体系的な記述を構想するのに対し、ジェンドリンは、あくまでもメタファの動的生産性を重視する。

②ジェンドリンの言語理論における意味創造は、究極的にはメタファによる類似性（似ている感じ）の創造であるとの結論が得られ、次のような、TAE 実施時の自己成長過程仮説理論モデルを創案した。

一般的に、類似性（似ている感じ）は、論理的に推論するよりも、身体感覚として感じるものだと考えられている。TAE では、随所で身体感覚（ジェンドリンの用語ではフェルトセンス）に集中する。これは類似性の創造を目的とする行為だと意味づけられる。一旦、身体感覚の類似性が創造されると、以後の体験において、似ている感覚を感じやすくなる。このプロセスにより、内省が再帰的循環となる。再帰的循環が形成されることは、内面的成長といってよい。身体感覚に働きかけ類似性を創造する TAE は、自己成長を促進する内省法として有効である。

③理論モデル研究の成果は、TAE シートの随所でフェルトセンスを感じるよう教示した点や、『主観性を科学化する質的研究法入門』（金子書房）の「理論編」執筆に活かされた。

(2)(5)研究ツールの開発と公開、サイト構築

①日本語教師が自由にアクセスし、TAE シートをダウンロードし、TAE による教育実践の振り返りがおこなえるウェブサイト「TAE リフレクション」を構築、公開した。

＜トップページ＞

「TAE リフレクション」から、書き込みシ

ート、教示シート各 27 枚、計 54 枚がダウンロードできる。教示に従いながら、書き込みシートに記入すると、自然に TAE による内省が展開するよう設計されている。

＜シートダウンロードページ＞

すべてのシートをおこなう「一般コース」の他、短時間で簡便におこなえる「ポイントコース」と「スピードコース」を設定した。実施者がニーズに合ったコースを選択できるよう、解説動画「コースの選び方」を制作、公開した。TAE の説明や、実施例閲覧ページも作成、公開した。

英語版、中国語版（繁体字）、中国語版（簡体字）、韓国語版、インドネシア語版、アラビア語版（シートのみ）を作成した。日本語教師や学習者が、教育実践以外の経験に適用できる拡張部分を付加した。

②「TAE リフレクション」の活用促進をめざし、日本語教育学会や交流協会台北事務所で、デモンストレーション等をおこなった。

(3)(4)データ収集と効果検証

本研究で開発した TAE シートを用い、データ収集と効果検証をおこなった。

①教育実習生

教育実習生Ａさんに、TAE パートⅠを実施してもらった。加えて、TAE 過程の随所で、SES(一般性自己効力感)、PMS(肯定的気分)、PA(肯定的自動思考)、SOC(首尾一貫 感 覚)の質問紙に回答してもらった。Ａさんは、1 週間の海外日本語教育実習を振り返った。シートの記述の分析から、TAE パートⅠの過程を通じ、ネガティブな感情から価値の探求へと内省の焦点が移行したことが窺えた。SES、PMS、PA、SOC の値はいずれも、ゆるやかに上昇し、特に、フェルトセンス形成前後で PA(肯定的自動思考)が、マイセンテンス形成前後で PMS(肯定的気分)が、増加していた。フェルトセンスを形成することで思考が肯定的に方向づけられ、マイセンテンス作成を通じ、肯定的気分が醸成されたと考えられた。

教育実習生Ｂさんに、TAE パートⅠを実施してもらった。Ｂさんは、1 週間の海外日本語教育実習を振り返った。また、TAE 過程の随所で、TAE 実施プロセス中に感じていたことを書き出してもらい、記述をもとに内省プロセスを検証した。Ｂさんは、マイセンテンス作成途中のシートに「コンプレックス、不安、焦り」の語を書く過程で、体験のネガティブな側面に気づいていた。その後、「プレッシャー」の語で表現したい意味を書き出す過程で「期待」の語が出て来た時に、「プレッシャーをポジティブに捉えられる自分」に気づいていた。Ｂさんの事例を通じ、言葉と感覚をすりあわせる作業で、ネガティブな側面からポジティブな側面が立ち上がり、「自信」がめばえる過程が可視化できた。

教育実習生Ｃさんに、TAE パートⅠを実施してもらった。Ｃさんは、1 週間の海外日本語教育実習を振り返った。研究代表者が教示を読み上げ、Ｃさんが内省を言語化しながらおこない、すべての過程を録音した。シートの記述の分析から、最初は「中身は絵に描けない」と語られていた実習体験のフェルトセンスが、最終的には、多層的動的構造の「気持ちの設計図」へと展開された過程が可視化された。録音の分析から、Ｃさんが「ネガティブな感じ」と呼ぶ「アンビバレントな認めたくない感じ」に近寄ったり離れたりしながら、その「感じ」から体験全体を構造化する言葉を紡ぎ出す過程が確認できた。

②初任期日本語教師

初任期日本語教師Ｄさんは、念願かなって日本語教師になったが漠然とした「面白くな

さ」を感じていた。TAE パートⅠ、Ⅱ、Ⅲを実施して言語化を試みたところ「日本語教師を続けるほどなりたい教師(自分)から離れていき、なりたくない教師になっていくからだ」とわかった。Dさんは自己理解を深め、成長への一歩を踏み出した。

③ベテラン日本語教師

ベテラン日本語教師Eさんに、TAE パートⅠ、Ⅱ、Ⅲを実施してもらった。Eさんは、日本語教師になって 10 年目の節目に、これまでの日本語教育実践を振り返った。TAE シートの記述の分析から、パートⅠで「みとめたくない私」に向き合い「やり直していく」感覚に焦点を合わせていることが窺え、パートⅡでは教育実践をとりまく諸側面が構造的に把握されていた。パートⅢでは、その構造が、3層が絡まり合い動く「実践の構成体」と表現された。Eさんは，10 年間の実践をまとめただけでなく，常に動いている日本語教育実践の「捉え方」を創造的に獲得した。

ベテラン日本語教師Fさんは、課外日本語イベント「ディベート大会」の運営体験を対象に、TAE パートⅠ、Ⅱ、Ⅲを実施した。パートⅡで抽出した 14 のパターンをネガティブ、ポジティブに分類し、別々にパートⅢをおこない、それぞれの原因を探求した。その結果、講師やアシスタントは、初対面にもかかわらず日本語ディベートの普及という目標を理解し運営を助けてくれた一方で、学生スタッフとは、目標の共通認識が持てずコミュニケーションがうまくいかなかったことがわかった。

ベテラン日本語教師Gさんは、短期留学プログラム中の1週間の、日本文化体験授業実施の体験を、TAE パートⅠにより振り返った。その結果、日本語レベルにかかわらず文化面でハイレベルな内容の授業が展開できたことが学生の満足につながったこと、一人一人の日本での文化体験と結びつけられなかった点に教師として物足りなさを感じていることが、明確になった。今後は個人発表や作文等の時間を作るとの目標を得た。

研究分担者は、H大学での授業に対する「何かもやもやと重苦しく」「内省が進まない感じ」を対象に、TAE パートⅠ、Ⅱ、Ⅲを実施した。パートⅠで「逃げようとする申し訳なさの不完全燃焼」と把握し、パートⅡで 12 の観点から振り返り、パートⅢで「他律的な役割は不自由であり自己と不一致するので、不安定になる」と言葉で表現し、これをきっかけに、具体的な授業の内省に進むことができた。内省が難しい場合にも TAE が有効であることが示された。

研究代表者は、勤務校が変わることを機にⅠ大学での日本語教育実践を、TAE パートⅠ、Ⅱ、Ⅲを用いて振り返った。その結果、自分の教育スタイルを、「日本語の授業を通じて、日本語の『正用例』だけでなく、『認め合う』という人間関係の『正用例』をクラスの中に生じさせる」と言語化でき、教育信念を明確に自覚できた。

④得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

方法面では、本研究で構築した TAE サイト「TAE リフレクション」からダウンロードした TAE シートを使い、日本語教師が教育実践を振り返ることが可能であることが示された。日本語教師が、自分で教育実践を振り返れる方法とツールを提供しているサイトは、国内外を通じて他に例がなく、インパクトがあると考える。

内容面では、TAE シートを用いた振り返りは、教育実習生、初任期教師、ベテラン教師と、幅広い層の日本語教育関係者が実践可能で、それぞれの体験を内省することにより教師としての成長につながる学びが得られることがわかった。本研究では、TAE による内省が自己成長につながることを、事例ごとに示したに止まったが、今後、計画的にデータを増やすことができれば、日本語教師のキャ

リア形成過程を一般的に論じることも可能になるだろう。

また、TAE は、キャリアの節目に長期間の教育実践を対象に実施することができる一方で、１回のイベントや短期間の授業を対象に、具体的な改善目標を得ることにも有効であった。教師の成長だけでなく、授業改善を目的とする活用法も、発展させていきたい。

本研究の過程で、TAE サイト「TAE リフレクション」を試用した日本語教師の意見を取り入れ、TAE シートを使って日本語教育実践以外の一般的な経験を振り返れるよう、サイトを拡張した。これにより学習者の経験の振り返りにも活用できる道が拓かれた。本研究の成果として構築した TAE サイト「TAE リフレクション」の、さらなる活用法を探っていきたい。

＜引用文献＞

小林浩明（2008）教師教育と教師の成長、北九州市立大学国際論集、6、47-58

得丸さと子（智子）・鈴木美希他（2010）質的研究ブリコラージュの手法による作文添削活動の実践研究、日本語教育国際研究大会発表論文 CD、520_1435pp.1-10

５．主な発表論文等

[学会発表]9 件

1.得丸　智子、日本語教師として輝き続けるために−TAE を使って内省的実践家をめざそう−、日本語教育研修会、2016 年 3 月 6 日、台北（台湾）

2.小林　浩明、若杉美穂、初任期日本語教師の感じる「面白くなさ」を探求する−TAE リフレクションによる分析−、日本教師学学会、2016 年 3 月 5 日、奈良学園大学（奈良県・生駒町）

3.得丸　智子、日本語教師と学習者のための多言語 TAE リフレクション、日本語教育学会、2015 年 10 月 11 日、沖縄国際大学（沖縄県・宜野湾市）

4.得丸　智子、小林　浩明、教師の自己成長のための実践ふりかえりサイト−TAE リフレクションの使い方とデモンストレーション-、日本語教育学会実践研究フォーラム、2015 年 8 月 2 日、国際交流基金日本語国際センター（埼玉県・さいたま市）

5.得丸　智子、小林　浩明、近藤　朋子、日本語教育への質的研究の貢献−TAE の３つの使用法−、日本語教育国際研究大会、2014 年 7 月 11 日、シドニー（オーストラリア）

6.得丸　智子、篠原　亜寿美、TAE を用いた教育実習の振り返りによる学びの深まり、日本語教育学会中国四国地区研究集会、2013 年 11 月 9 日、島根大学（島根県・松江市）

7.TOKUMARU, Satoko 、TAE process and Conceptual metaphor、2013 年 5 月 30 日、スツェルン（スイス）

[図書]1 件

1.末武康弘、諸富祥彦、得丸智子（さと子）、村里忠之、金子書房、「主観性を科学化する」質的研究法入門−TAE を中心に−、2016（近刊）、pp.68-114

[その他] １件

1.TAE リフレクション http://taejapan.org

６．研究組織

(1)研究代表者

得丸　智子（TOKUMARU, Satoko）

宮崎大学・教育文化学部・講師

研究者番号：６０３４３６１２

(2)研究分担者

小林　浩明（KOBAYASHI, Hiroaki）

北九州市立大学・国際教育交流センター・准教授、研究者番号：１０３２６４５７

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者

坂野　加代子（BANNO, Kayoko）

上條　純恵（KAMIJO, Sumie）

近藤　朋子（KONDO, Tomoko）

清水　順子（SHIMIZU, Junko）

篠原　亜寿美（SHINOHARA, Azumi）

竹内　七奈（TAKEUCHI, Nana）

若杉　美穂（WAKASUGI, Miho）